

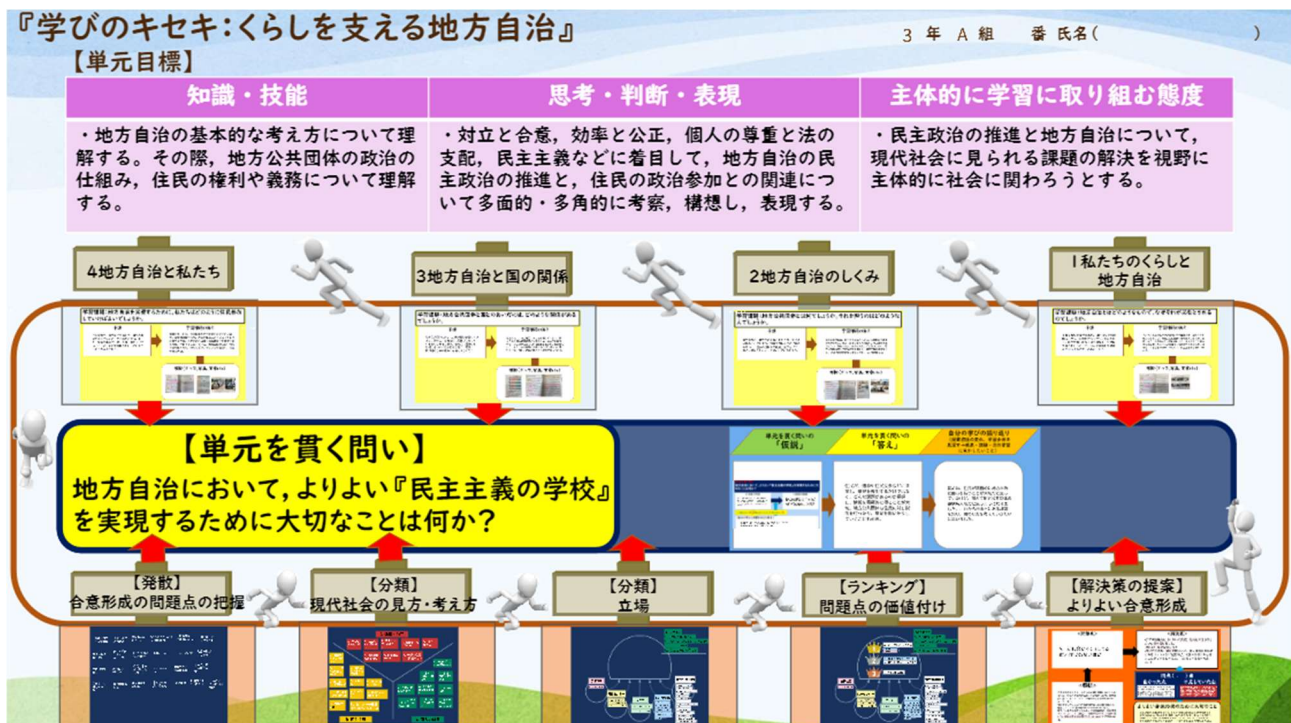
授業の成果と課題

1 授業の実際

(1) 板書



(2) OPPIA



(3) 生徒の学びの実際

ア 「自己調整」の促進

① 「計画」の段階（生徒のワークシートから抜粋）

【1回目の予想】

住民の意見を反映させたり、意思表示をすることが大切だと思うので、投票率の低下なども叫ばれる中、地方自治への関心を持っていくことが必要だと思う。地域それぞれの課題に対応した政策を行っていくことが必要だと思う。

【2回目の仮説】

住民が、自分たちが積極的に地域を変えていくという意識を持ち、地方の現状を知らないことには始まらないので、地方自治への関心を持っていくことが大切だと思う。また、関心を持つだけではなく、自分の意見を投票を通して示したり、意見を共有できる場を設けたりしたより良い民主主義の学校を実現していけると思う。

①【変わるA→B】②【増えるA→A+B】③【決まるA→A】

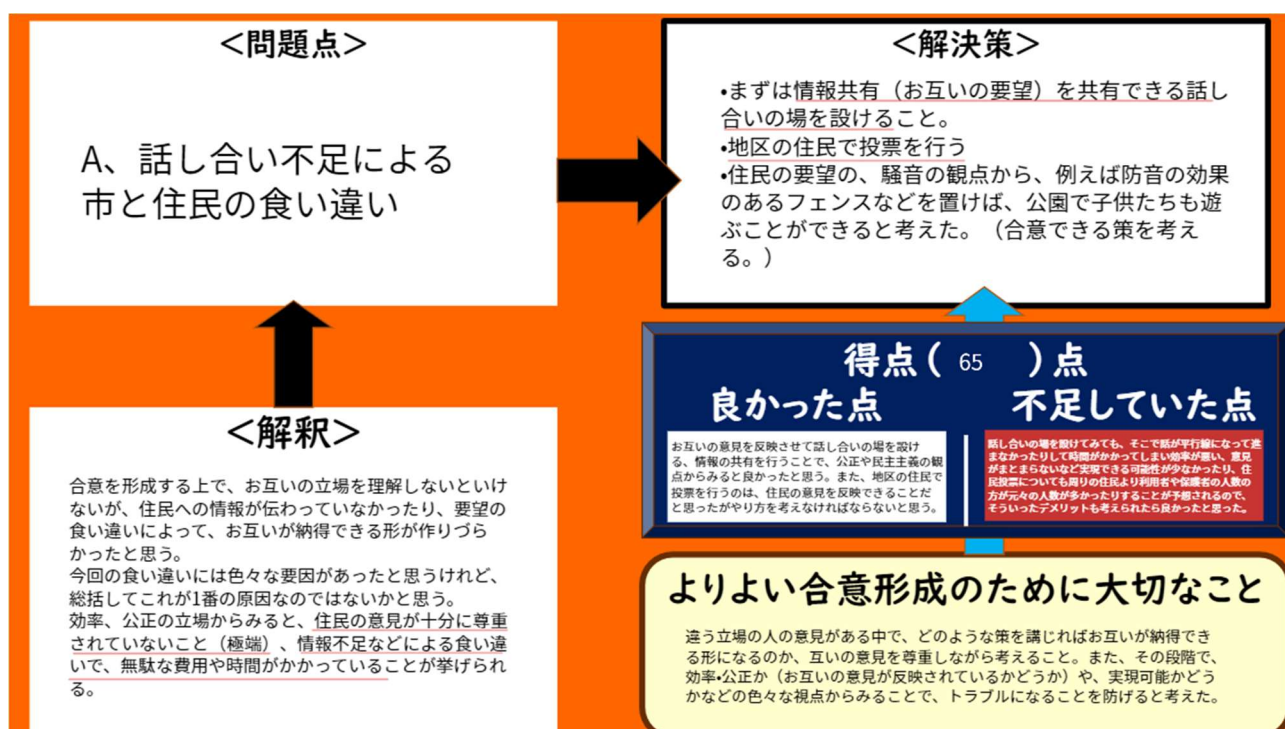
【自分の考えに影響を与えた発言】

- ・自分が地域を変えられる、変えていくという意識を持つこと（山下くん）
- ・保守的にならずに、色々な政策を施行してみる（安永さん）
- ・自分たちの意見を共有できる場を作ること（高橋さん）

②「自己内省」の段階（生徒のワークシートから抜粋）

- 仮説では、情報が行き届くことが大切であると考えていたが、授業を通してその考え方に加えて、政治参加への意欲を持ち住民同士の話し合いが大切であると考えられるようになった。また、今回の内容は私たちにとって身近な単元であり「まだ中学生だから」などと考えず今の地域の課題やそのためにできることを考えることが今後のために必要だろうと思った。今後の学習ではなぜその決まりが必要なのかなど深く考え理解していきたい。
- 私自身、地方自治の興味や知識が全くなかったが授業を終えてそれは自分達の環境や将来に大きく関わることがわかったので、最終的には積極的に参加できた。しかし、愛媛の自治体と住民との関わりがまだわからないので、愛媛県民として調べていきたい。
- 今回はそれぞれの立場の利害を考え、公正と効率の面から物事を見ることができました。また、果たしてそれが実現可能かなど、現実的に問題の解決方法の作成に取り組むことができました。しかし、課題だったのが専門的な事実の深掘りが十分にできていなかったことです。成り行きは資料によってしっかり確認できましたが、解決策を考える際に、子供の声の大きさは一体どれくらいだったのかなどの調査がしっかりできていたら意見もより深く作れたなと思いました。これからいろいろな課題解決をしていくにあたって、事実の深いところを知り、より公正な面で物事を見ていきたいです。
- 初めは、住民が積極的に地方自治に関心を持つことが大切だと思っていたけど、加えて地方公共団体の役割も大切だと思うようになりました。これから松山市にある課題を知り、関わり方を考えていきたいと思いました。
- 今回、地方自治について学んで自分たちが普段どのような仕組みで暮らしているのかや、自分にできることが分かりました。これからその仕組みを理解して日常生活に生かしたり、権利を上手く使えるようになりたいです。
- 知識が増え実際の問題を考えることで他の身近事例においても複数の観点から考え、より良い自分の意見を持つことができるようになった。また実例を挙げることで深まったので実生活と関わりある公民でも関連付けて考えたい。

イ 「仲間や教師との関わり合いや協力」の場面設定（生徒のワークシートから抜粋）



ウ 授業前後のアンケート結果（「5：とても思う」「4：まあまあ思う」の合計の割合）

項目	授業前	授業後
自分の国や地域の課題解決に関わろうと思うか。	46%	67%
自分で国や地域を変えられると思うか。	19%	20%

2 成果（○）と課題（●）

(1) 「自己調整」の促進

○ワークシートに「自分の考えに影響を与えた発言」の欄を設定し、生徒に記入させることで、メタ認知力を働かせながら、他者との対話の意味を実感したり、自己の意見の改善に気付いたりさせることができた。

○単元を貫く学習課題（MQ）への仮説を単元の初段階で立て、1時間ごとの授業内容をMQと関連付けて追究させることで、主体的に取り組ませ、生徒にとって授業前後の自己の変容を実感させやすくすることができた。

●授業後のアンケート「自分で国や地域を変えられると思うか」の項目では、授業前とほとんど結果が変わらなかった。これは、生徒の中に、自分が行動しても何も変わらないという無力感や自信のなさに関係していると考えられる。若者による具体的な成功例を提示し若者の行動が社会に影響を与えられると気付かせたり、課題解決のための方法や権利を理解させたりする必要がある。

(2) 「仲間や教師との関わり合いや協力」の場面設定

○公園廃止問題をケーススタディとして取り上げ、音の問題を「騒音と煩音」で帰結する展開で現代社会の問題を探らせることができた。

○実際におこった公園廃止問題という生徒に身近な題材を取り扱うことで、リアリティを感じさせながら具体的な解決方法を身に付けさせたり、自分の生活や将来と関わりを持たせたりと、自分事として追究させることができた。社会科は過去の事例から学び、未来につなげることが大切でそれを具現化することができた。その結果、授業後のアンケートでは、「自分の国や地域の課題解決に関わろうと思うか」の項目で向上が見られた。

○現代社会の見方・考え方を分析概念として活用しながら追究させることで、感情論に陥ることなく論理的に考察させることができた。また、「実現可能性」「有効性」「妥当性」の視点から、それぞれの意見を再考させたことで、理解を深めたり、議論の質を向上させたりすることができた。

○仲間との議論を通して、多様な立場や視点から事象を考察し、よりよい意見をつくろうとしたり、立場の異なる人との合意形成を見付けようとしたりと、公正な判断を目指そうとする姿が見られた。その結果、自分たちの生活する松山市や愛媛県への関心を高め、新たな問いを創出し、主体的に追究しようとする場面が見られた。

○ゲストティーチャーの活用により、公園の機能の多面性に気付いたり、合意形成の重要性について実感したりさせることができ、理解が深まった。

●生徒の発表→意見で完結しているため、自分の意見に納得することで終わっている。そのため、教師のファシリテートの充実により、新たな発見や課題が見付かるような場を提供する必要がある。

●授業内での生徒の意見を板書して知識共有の場を工夫することで、生徒の課題の焦点化を図る必要がある。

●生徒からゲストティーチャーに合意形成や公園廃止問題について質問を投げ掛けたり、ゲストティーチャーから生徒の意見にフィードバックしてもらったりすることで、理解が深まったのではないかな。